
カミカゼに乗せて

風車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カミカゼに乗せて

【Nコード】

N8610X

【作者名】

風車

【あらすじ】

それは、ある寒い日の朝のことだった。

俺は突然の轟音に目を覚ます。急いで外に出た俺だったが、そこにあつたのは、二階部分がぶっ飛び、廃墟同然となっていた我が家と、一人の少女。

彼女の手にあつたのは、未だ煙が立ち上っているロケットランチャーだった！？

第一弾：Why did it become this?

どうしてこうなった……。

俺は、軽く現実逃避に陥りながら思った。

俺の家の前の道路には、男と少女が向かい合うようにして立っていた。

ただ、立っているだけならよかった……。しかし、何故か現実はその甘くない。

「はぁーっ!」

少女の叫び声と共に、少女の両手に持たれていた二丁の薄紫の拳銃から銃弾が飛び出したのだ。

拳銃の色以外はまるで小説のようである。いや、寧ろ拳銃の色の点で言えば、現実は小説より奇なりとはよく言ったものではないのだろうか。

左右の拳銃から放たれた一対の銃弾は少女の向かいに立っていた男へと飛んでいった。たぶん。

生憎だが、俺の動体視力には銃弾を見切れるほどのスペックはない。

だが、しかし、銃弾が男へと向かっていったのは確かなのだ。

なぜなら、

「この程度の武器で俺が倒せると思ったら大間違いだぜ、お嬢ちゃん」

男は掴んだのだ。少女が放った銃弾を。

いや、正確にいうと、二つの銃弾は男の目の前で急激に減速し、完全に停止してから男が構えた掌の上に落ちたのだった。

現実とは思えない不思議な光景だった。

なんだこれ……、こんなの、狂ってる!?

「ハハッ！ だから言っただろ、お嬢ちゃん」

男は手に持っていた銃弾を強く握った。

そして、握られた拳が開かれたとき、そこには、どのような手品を使ったのかは分からないが、銃弾はおろか何も残っていなかった。

「能力使用の後は、手品か？ ずいぶんと余裕だな」

少女は、そんな男の行動を鼻で笑った。

「残念、これは手品じゃないぜ、お嬢ちゃん？」

「ほう。つまりは、それも能力ということか」

能力？ 先程から少女たちはそんなことを言っているが、一体な

んのことなのだろう？

少なくとも、日常会話ではあまり聞かない言葉だ。

「ご名答だ。利口なことだよ、お嬢ちゃん」

「貴様、先程からお嬢ちゃん、お嬢ちゃんと言っているが、私はもう十六だ。子供扱いしないで貰おう」

今まで我慢していたのか、少女の拳は限界まで握られ、プルプルと震えていた。

「ってか、十六って……。それにしても、背も低くて、顔立ちも幼い。ハッキリ言って驚きだ。」

「あれ？　そういえば、彼女の着ている服はウチの女子の制服じゃないか？」

「ハハッ、最近の女子っておつかねえな……。」

この非現実的な状況に、俺の思考は完全に麻痺していた。

「そうか、そいつは悪かった。だかな、俺から見れば、お前なんかただの小娘でしかねえんだよ！」

その声と共に、男が動いた。

「今度はこっちの番だぜ！」

男が声を出したその瞬間、男の背中から翼が生えた。

それはまるで、透き通ったガラスのようで、俺は一瞬、その美しさに目を奪われた。

しかし、よく見ると、その羽はガラスでも何でもなく、ただの氷であると分かった。

なんなんだよ！ いったい……。

そうか、夢か？ そうだ、こんなの夢に決まってる。こんなに狂った世界が現実な訳がない！

少女が男の背中から生えた氷の翼を見て笑う。

「氷か……、貴様のように冷たい瞳を持った人間にはお似合いだな」

「それは、褒め言葉と受け取っておくぜ！」

男は瞬間的に少女との距離を詰めた。

まさに一瞬。そして、次の瞬間。男の振り上げられていた腕が少女へ下ろされようとしていた。

何をしたのか分からないが、彼の手には既に氷柱があり、それで相手を貫こうとしているのは誰の目にも明らかだった。

「さよなら、お嬢ちゃん」

無情にも、男の持った氷柱は少女を貫通した。

少女は氷柱が胸に刺さった状態のまま膝から崩れ落ちた。

「なんだ……これ……」

俺は、人殺しの現場に遭遇してしまった。

頭がパニックって、思考が停止する。

なんだ、なんだ、何なんだ！？ 何が起きた？ 何が起きている

？ どうすればいい？ 次は何が起きる？ 次は 俺？

男が少女の亡骸の前に立っているのを見て、俺は戦慄する。

逃げなきゃ……。

しかし、頭が叩き出した結論に、身体が反応できなかった。

いや、違う。

俺の足がこの場から動かなかったのだ。

足が地面に埋まっているから……。

どう考えても逃げられない。

つまり、詰んだ。

「おい、神田白亜」

男は氷の翼を畳み、倒れたままの少女の方を向いて、俺の名前を

呼んだ。

「は、はい!？」

思いがけない言葉に、俺は声を裏返らせながら返答する。

「さっきは、すまなかつたな」

恐怖に怯えた俺に掛けられたのは、予想に反して、労りの籠った言葉だった。

何なんだ、こいつは!？ いきなり態度が一変した。

何なんだ、何なんだよいたい! あんなことできる奴ら、絶対人間じゃないに決まってる!!

「いったい……………あんたたちは何なんだ？」

自分に敵意が無いと感じたせいか、気がついたらそんなことを聞いている。

「『何なんだ?』か。面白いことを言うな、お前は」

男は軽く苦笑しながら言った。

「俺は人間だぜ? お前と同じな」

「人間だと? お前らが?」

俺の言葉に、男は少し顔を歪める。

「チツ、任務だから見逃してやるが、次に同じことを言ったら、殺すぞ、貴様」

男は、俺の人生の中で今まで見たことの無いような、憎しみの籠った目で俺のことを睨み付けた。

「……ッ」

俺が一瞬怯えたのを見て、満足に思ったのか、男は再び普通の口調で話し出した。

「さて、質問の続きを答える前に、お前にこの事を謝っておかなくちやな」

男は、俺から視線を外し、俺の後方にある建物の残骸を見ながら言った。

そこにあるのは　いや、あつたのは、間違いなく俺の家。

しかし、現在はただの廃墟と化している。

こいつらに。この、狂った奴らに、壊されたのだ。

今から約三十分前。

ドカーンッ！！

とてつもない爆音によって、俺はまどろみから強制的に目覚めさせられた。

俺は急いでベッドから飛び出す。

何があったのか、と辺りを見回してみる。

右、左……うん、いつも通り、散らかった部屋だ。

ということは、どこかの工事現場で、何か起きたのだろうか？

そんな結論に達したときだ。僕の頬を、冷たい風が撫でた。

「うお、寒い寒い」

思わず呟いてしまった。

俺は、こんなに寒いなら、もう一眠りしておこうと思い、壁に掛かっている時計を見た。

しかし、時計がない。

それどころか、もっと大事なものがない。

「天井どこ行った!？」

俺の頭上にあったのは、白い天井ではなく、冬の陽気で晴れ晴れとした青空だった。

続いて俺は家の構造を思い出す。

丁度、俺の部屋は一階にあつて、その真上の二階にはリビングが。

そこまで考えて、俺は急いで家の外に出た。

「な、なんじゃこりゃ!？」

外では、案の定というか、なんだか予感のままであつて欲しかった光景が広がっていた。

家の二階部分がまるまる、吹っ飛んでいたのだ。

「いつたい、誰がこんな酷いことを……」

俺は呆然と咳き、辺りを見渡した。

すると、そこには、未だ銃口から煙が立ち上りつつある薄紫の口ケットランチャーを手にした少女と、その反対側に、上下を水色のスーツ、その上に同色のコートを羽織った男が立っていた。

「……………」

コイツらか。

一瞬で、理解した。

だが、この状況、俺にどうしろと言つのか……。

相手は、完全な武器持ち。対する俺は、完璧に手ぶら。力の差は

歴然だった。

「おい、貴様」

少女のほづが俺に声を掛けてきた。

「な、何だよ……」

少女に対して、俺は無意味な虚勢を張る。

「言っておくが、その家を破壊したのは奴だ」

少女は後ろ指で、男を指す。

「でも、それ……」

あまりにも無茶苦茶な言い訳だったので、思わず、彼女の持っているロケットランチャーを指差してしまった。ちなみに、未だに煙が上がっている。

「アイツが私の攻撃を弾いて、貴様の家へぶつけたのだ。つまり、直接的には私は関係ない。責めるなら、あの男を責めろ」

なんと自分本意な考え方だろうか。

いや、それよりも、聞き逃してはいけない単語を聞いた気がする。

弾いた？ ロケランを？

俺は軽く頭痛を覚えた。

「おいおい、そいつはないんじゃないか？ 元々、俺は忠告しておいただろう。にも関わらず、攻撃を仕掛けてきたのはそっちだ」

男がこちらに向かって歩きながら言ってきた。

「ふん、私は任務の遂行のために邪魔者を排除しようとしたただけだ」
平然と、さも当然のように、少女は言う。

任務の遂行？ 邪魔者を排除？ 何を言っているんだ、この女は……。まともな人間とは思えない。

そもそも、少女や男の服装を見れば、頭のおかしい奴等だというのは一目瞭然ではないか。

少女はなんか変な色のロケランを装備してるし、男に関しては昔前の芸人のような格好をしている。

「ほう、つまりは、この場を何らかの形で乗りきらなければ、俺達は先に進めないということか」

男の方が、ニタニタと笑った。

「そういうことだっ！！」

少女は男の言葉に返答すると同時にロケランの銃口付近の部分と持ち手の部分を掴んで、掲げるようにした。

すると、ロケランは薄い紫色に光り、二丁の拳銃へと姿を変えた。

すかさず少女は、男の足元へと銃弾を二発、威嚇射撃する。

男はそれをバックステップでよけた。

「ちっ、面倒な相手と当たっちゃったぜ」

男は未だにニタニタと笑いながら悪態を吐いた。

「とりあえず、逃げられると困るからな、お前のことは足止めさせて貰ったぜ」

続けて、男は俺のほうを見ながら、そう言った。

今の言葉は誰に向けられたものだろうか？ 俺か？

……じゃあ、逃げられないって、

「あぁっ！？ 嘘だろ」

足が地面に埋まっていた。しかも、コンクリートに。

どういうことだよ！？ 土に足が埋まるのならまだしも、コンクリートって、絶対抜けないじゃん。

ダメもとで足を動かしてみる。やはり、動かない。

完全に、逃げられなくなった。

こんなの……狂ってる！

どうしてこうなった……。

「すまなかった」

男は頭を下げて謝罪した。

「……………」

俺は返答に困ってしまった。

この男に、家を壊された怒りをぶつけたとしても、壊れた家は直らない。

それどころか、もし、俺の言葉が彼の逆鱗に触れてしまったら、先程の少女のように俺も串刺しになってしまうに違いない。

反対に、別に大丈夫ですなんて言って、本当に家の修理についてをスルーされても困る。

そもそも、こんな簡単に人を殺すようなぶっ飛んだ奴に、壊したものを直すという考えが通じるかが問題だ。

「では、質問の答えの続きだ」

返答に迷っていたら、話が変わってしまった。

「あ、はい」

またもや中途半端な返答になってしまった。

「まずは、ざっくりと説明しておこう」

男は顎を触りながら空を見つつ言った。

「俺達は使役者だ」

「し、えきしゃ？」

「そう、使役者。個人の中にある特別な法則を操る者のことだ」

男は真剣な表情で話す。だが、そのわりにどこか周りを気にしているのは俺の気のせいだろうか。

「細かい説明は後回しだ。とりあえず、単刀直入に言うぞ」

突然、男の口調が早口になった。

「お前、世界が欲しくないか？」

「は？」

あまりの話の壮大さに、俺は啞然とする。そして、こいつの考えが狂っていることを再確認した。

「世界を手に入れることくらい、俺達、使役者には造作もないことだ」

男は、一旦、そこで言葉を切り、ニヤリと笑う。

「なあ？ 同類？」

「はあ？」

同類？ どういうことだ？

俺の反応を見て、さも嬉しそうに、男は笑いながらこう言った。

「気づいてないのか？ 使役者なんだよ、お前も」

第二弾：The end of my days

その言葉を聞いたとき、世界が一瞬、暗転しかけた。

あと一歩という寸前で、俺は意識を取り戻す。

そして、突き付けられたおぞましい真実に目を向けることとなった。

「俺が、使役者？ お前らと同じ？」

「ああ、そうだ」

男はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべた。

「しかも、すげえぞ。ただの使役者じゃねえ。お前は特別なんだ」

『使役者＝狂ってる』の等式が成り立ちつつあった俺の頭に、その言葉は重く響いた。

特別……ってことは、つまり、俺は特別狂ってるってことじゃないか？

「さて、神田白亜。お前に質問がある」

完全鬱モードの俺に、呑気に男はそんなことを言った。

「今のお前のように、初めて使役者を見た人間は、一般人と使役者の中で差別化を図ろうとして、俺たちのことを見下す。」

そして、それだけの理由で使役者を迫害する。

そのため、俺達は今まで自分の能力を周りに見せないようにひっそりと生きてきた。

だが、そんなことを我慢していられるほど、俺達は人間出来てねえんだよ。

なあ？ 神田白亜？ 堪えられる訳ねえよな？ なあ！

分かってんのか？ 次はお前なんだよ！ お・ま・えの番なんだよ

「…………俺の、番？」

俺は、その言葉に反応した。気がつくとも手が震えていた。

ただ、ひたすらに怖かった。自分自身が知らなかった自分 使役者としての自分が、周囲の人間に否定されることが。

今まで、俺自身が、使役者を否定していたのに、調子のいいことを言っているのは分かってる。

だが、自分が否定される側に回ったことで気づいたのだ。いや、思い出したと言った方が正しいかもしれない。

遠い昔に封印したはずの否定されることへの恐ろしさが、俺の中で音を発てて一気に膨れ上がる…………。

「そうだ、お前の番だ。なあ、分かるだろう？ 俺達は仲間なんだ。助け合うべき仲間なんだ」

男が、『仲間』という言葉を強調し、俺に詰め寄った。

「だったら話は簡単だ。俺達の存在を世界に認識させればいい。そして、仲間を増やして、世界中の誰もが俺達 使役者を否定できないようにしてやるんだ」

「……………」

俺は、いつの間にか、男の言葉に共感を感じていた。

それは、自分が使役者として生きていくことのできる未来を思い描くことができるようになったからかもしれない。

「なあ、神田白亜。俺達の仲間にならねえか？」

悪魔の囁きだった。

俺は男の言葉に頷きそうになる。

今日、突然、人間の世界から疎外され、使役者のレッテルを貼られた俺は、あまりの超展開に相当混乱していたようだ。

しかし、その時。

男の後ろに横たわる名も知らない少女の虚ろな瞳が俺の視界に入った。

そして、疑問が沸いた。

……使役者の存在は、他人を殺してまでも世界に知らしめる必要があるものなのか？

そう思ったら、知らないうちに少女のことを見つめてしまっていた。

何故だろうか？ 俺は今、彼女を人間だと考えてしまった。やっ
てることは人間から遙かにかき離れているのに……。

いや、違う。

俺は、俺自身の考えを理由付けるために、彼女を人間だと思っ
たんだ。

そうだ。そうなのだ。

俺は、人間を殺したくない。だから、人間とまったく同じ容姿を
した彼女らを殺すのに気が引けているだけだ。

俺自身の肯定アイデンティティできる自分を守るために……。

そう結論付けると、なんだか気分がスッキリした。それに合わせ
て、頭の中も次第に明瞭になっていく。

そのお陰か、それとも単純にこの状況に馴れてしまったのか、ど
ちらも変わらないが、俺は今の状況を冷静に考えることができるよ
うになってきた。

そこで、ある違和感に気付く。

何かとは、具体的には言えないが、何か明らかにおかしい。

俺の視線の先にいる少女。恐らくはもう死んでしまっているのだろうが、彼女の姿を見て、何か不自然なことがある気がした。

「さあ、答えを聞かせて貰おうか？」

男がニタリと笑う。

だが、その言葉は俺には届かなかった。

何が違うのか、何がおかしいのか。

俺の意識は、違和感の原因へと完全に向けられていたのだ。

「あ

そして、気付く。

なぜ、今まで気付かなかったのだろうか？ この状況は、初めから、おかしかったのだ。

それは別に、狂っていたという訳ではない。そういう意味ではなく、単純に不自然な部分を見つけたというだけだ。

一つの　しかし、無視するには大きな矛盾が、そこにはあった。

だが、しかし、本当にそうだったとしたら……。

ガキンッ！

俺がある結論に達したとき、男が何者かに狙撃された。

しかし、その銃弾は男の氷の翼によって、いとも簡単に弾かれる。

「ハッ、遅かったなあ。穏健派のお嬢ちゃん！」

男は大きな声で叫んだ。そして、翼を広げて、俺から遠ざかる。
いや、正確には、俺の背後　廃墟となった我が家から。

「フン、貴様こそ、私を泳がせておいて、随分と余裕ではないか？」

カツッ。

靴音を響かせて、一人の少女が俺の家の屋根の上　その部分は
奇跡的に無傷だった　に立った。

その手には、薄紫色のライフル銃が握られている。

「ケッ、ハンデだよ。俺とお前じゃあ、力の差は歴然だ」

男は、翼を一振りし、向かいの家の屋根に立った。

男の方が、僅かに目線が高くなる。

「やっぱり、生きていたのか……」

俺は、一人眩き、屋根の上の少女を見る。

そこにいたのは、先程、男に殺されたはずの少女だった。

俺の予想は正しかった。

やはり、少女は死んでいなかったのだ。

そもそも、彼女が男に、氷柱で刺殺されたとき、圧倒的に足りないものがあつた。

血、である。

人が刃物や鋭いもので刺された場合、必ず、出血が起こるはずだ。

それこそ、男の水色のスーツは、血液を含んで、赤黒く染まっていたことだろう。

しかし、あの場には、それがなかった。

そこから、あのとき、少女の死体だと思っていたものが、彼女の何らかの能力によって作られたものであつたということが簡単に予想できたのだ。

俺は、少女の作られた死体フェイクの方に目を向ける。

少女の死体は黒い粒子となり、風と共に空気へと溶けていった。

これで、俺の予想は正しいことが証明された。

少女は、それを横目で確認しながら、俺の呟きに返答した。

「当たり前だ。私だって、穏健派の幹部なのだな」

少女は軽く笑う。

「それに、我らがリーダーは、私を信じてこの任務を託してくれたのだ。期待を裏切るわけにはいかないだろう」

「ハッ、下らねえ」

少女の言葉をバカにしたように笑い、男は言った。

「……なんだと？」

男の言葉に、少女は反応する。

「この世は所詮、弱肉強食なんだよ！ 誰かのために戦うようじゃあ、俺には勝てねえ。自分のために強くなった俺にはな」

「面白い。試してみようじゃないか」

ニヤリと笑って、少女は俺の家の屋根から飛び上がる。

瞬間、少女の手に持っていたライフル銃が薄紫の光を放ち、日本刀へと形を変えた。

鞘も持ち手も薄紫色だ。

「いくぞー！」

人間とは思えない跳躍力で、少女は道路を挟んで向かい側の家の屋根まで跳んだ。

すなわち、男のところへ。

シャキーン……。

澄んだ音と共に、刀が抜かれる。

その刀身は、全てを反射し、拒絶するような冷たい光を纏う白銀だった。

「お前程度の攻撃じゃ、俺の氷は砕けねえよ！」

男は、氷の翼で、少女の刀を迎え撃つ。

二人の力がぶつかり合う。

そして、

「なっ!?!」

「確かに、私の力では貴様の氷の翼を砕くことはできない。だが、斬ることなら、できる!」

少女の刀は、まるで吸い込まれるように男の右翼を切り裂いた。

そして、その翼の残骸は、斬られた部分から水蒸気へと変化していき、無くなった。

「くっ……」

突然、左右のバランスが崩れたためか、男はよろめく。

少女は、その瞬間を見逃さない。

刀を切り上げて、男の首を狙う。

だが、

ピタッ。と、刀の動きが止まった。

「な、なんだ!？」

少女は慌てた感じで、身体を動かそうとするが、腕は愚か、身体全体が動かないようだ。

「くそっ!」

唯一、動かせた手首を返して、少女は斬撃を繰り返す。

しかし、男は後ろに一步下がって、日本刀の攻撃範囲から脱け出した。

「いやあ、危なかった危なかった。少し見くびってたぜ、お嬢ちゃん」

ククク、と男は不気味に笑い出す。

そして、男の背中には再び氷の翼が生成された。

「貴様……ッ」

ギリギリと、歯を食い縛る少女。対する男は、ニヤニヤと口元が緩みっぱなしだ。

「まさか、俺の氷翼^{ひょうよく}が斬られるとはな。その歳で幹部^{かんぶ}なのも伊達じやねえってことか」

男は、ひたすらに笑いながら少女を見つめる。

「私に、何をした!」

少女は身体を動かそうとする。だが、一向に動ける気配はない。

「動きを封じたただけだ。俺の能力でな」

少女の身体をよく見ると、身体の至るところに氷が張り付いていた。

少女も、それに気づいたのか、腕に張り付いている氷を見て……笑った?

「なんだ、氷か」

まるで、なんともないと言わんばかりに少女は笑っている。

「そんな、直接的な束縛は」

少女は、日本刀を手のひらの上で回転させ、逆手に持った。

「私には効かない！」

そして、切っ先を自らの腕に張り付いていた氷に押し当てる。

ピキン、と音がした。

すると、切っ先を当てた氷を始点として、少女を拘束していた氷が砕けた。

「氷の縄が解かれただと！？ ……まさかとは思っていたが、その刀、ただの刀じゃねえな」

男は、ついに、真剣な顔つきになり、少女の刀を見つめた。

「まさか、妖刀……か」

「ほお、知っていたか」

少女は男を睨み付けながら、口元だけ笑った。

「だが、正確には違う。この刀は、妖刀の出来損ないだ。まあ、それでも、貴様を倒すには十分な強さだがな」

「はあ、俺も舐められたもんだな」

少女の言葉に、男は呟いた。

「貴様だって、私を見くびっていただろう。やってることは、大して変わらんぞ」

「ハッ、違いねえ」

男は自嘲気味に笑う。

「一つ教えてやるう」

少女は、男に刀を向けて言った。

「貴様の攻撃は、私の前では無力だ」

その言葉に、男の顔は歪む。

「おもしれえこと言うな、お嬢ちゃん」

そして、男は、自分の周囲に沢山の鋭く尖った氷の欠片を纏った。

男と少女、二人はお互いに戦闘体勢に入り、互いを睨み合う。

そして……

先に動いたのは男だった。

周りに浮いていた氷の欠片を飛ばしてくる。

それと同時に、少女の足を氷が地面に縫い付けた。

一瞬で、少女は追い込まれた。

そう思うと、少女は、刀を持っていた右手とは逆の左手を氷の欠

片に向けて伸ばした。

「ハッ！」

すると、少女の目の前に、少女を氷の欠片から守るようにレンガの壁が出現した。

氷の欠片は壁に突き刺さる。

その間に、少女は両足の拘束を解いたのか、すぐさま攻撃に転じる。

自らが作った壁を、自らの刀で切り裂き、男へと突き進む。

「終わりだっ！」

「させねえよ！」

正面から突進してくる少女に向かって、右手の氷柱を投擲した。

当たる！？ 俺がそう思ったときだ。

氷柱が刺さった瞬間、少女の姿が掻き消えた。

「なんだと」

男が思わず呟いた。その後ろ。

ザシュッ！ ザシュッ！

二回の斬撃で少女は男の翼を切り落とし、

「ラストオ!!!」

男の背中を斬りつけた。

男は前のめりに吹っ飛び、俺の家へ……

突っ込んだ。

しかも、奇跡的に無傷だった一階部分に。

俺は、開いた口が塞がらなかった。

「安心しろ、峰打ちだ。私は、貴様のように、本気で人を殺すつもりはないからな」

少女は、我が家の惨状に啞然としていた俺の隣に、飛び降りた。

ズダーンッ！

そのとき、我が家の一角が猛烈な勢いで吹き飛ぶ。ちょうど、男が埋まった辺りだろう。

「やれやれ、三態使いではダメでしたか。まあ、いいでしょう」

周りの障害物が吹き飛んだおかげで、地面に横たわる人と、その傍らに立つ人の、合計で二人の人影が見えた。

片方の横たわっている方は、先程の水色のスーツの男だった。

恐らく、状況的に考えて、三態使いと呼ばれたのはこいつだろう。
そして、もう一人の人影は男か女か判らない長い黒髪の人物だった。

その人物は、身長はそこまで高くはなく、先程の三態使いと呼ばれた男より頭一つ小さい。

「貴様、何者だ」

俺の隣で、少女が言った。

俺は、足が固定されたままなので、身体を捻って、ことの成り行きを見守る。

「それは、言えません」

黒髪男女は、フツツと笑う。

「私はただ、部下を拾いに来ただけですから」

「なるほど、どうやら貴様も過激派の一味のようだな。なら、こいで潰しても問題はないだろう」

少女が黒髪男女を睨み付ける。

「いえ、それは困ります。それに、私は、あることをそちらの神田白亜さんに伝えるだけなので、気にしないでください」

黒髪男女は少女の視線をもともせず、微笑を浮かべた。

「あること？ 俺に？」

過激派やら三態使いやら、よく解らない言葉の中から、突然飛び出した俺の名前に驚いて、俺は聞いた。

「はい。先程、我々の盟主から連絡がありまして、『神田白亜は我々ではなく、穏健派についた。よって、今後は危険分子として扱うように』とのことでした」

「穏健派……」

俺は、三態使いの男が、俺の隣に立つ少女に向かって、『穏健派のお嬢ちゃん』と言っていたことを思い出す。

「ちよっと待て、俺がいつ、この女の仲間になるって言った」

「あれ？ 違うんですか？」

男女は不思議そうに首をかしげる。

「ちげえよ！ 誰がお前達みたいにおかしな奴の仲間になるか」

「お、おかしな奴だと！」

俺の隣で、少女が怒り出す。

しかし、それとは反対に、男女は笑い出した。

「ハハハツ、おかしな人ですね。私たちも、あなたも、同じ人間じゃないですか」

「同じ？ どこが？ 俺はお前達みたいにおかしな行動は絶対にしねえ」

「どうしてあなたは、私たちを特殊な力を持っているからといって排除しようとするんですか？」

男女は眉を八の字にした。

「当たり前だ、お前らが普通じゃないからだ」

「そうですか……」

男女は諦めたようにため息を吐き、咳く。

なんだこれ。まるで俺がおかしいみたいじゃねえか。

「それでは、ここらで我々はお暇させていただきますよ」

黒髪男女は軽く微笑をし、ヒョイ、と男を担いだ。

身体に似合わず、凄い力の持ち主だ。

「ま、待てっ！」

少女が男女を止めようとするが、

「面倒ですね。しつこい女性は嫌われてしまいますよ、っと」

男が軽く手を振る。

すると、真っ赤な閃光がこちらに向かって飛んできた。

「チッ」

少女は舌打ちをしながら、俺と閃光の間に割り込み、閃光を日本刀で切り裂いた。

眩い光が辺りを包み、俺の視界は瞼の裏の赤で染められる。

「くそっ、逃げられたか」

俺が何とか目を見開くと、そこには、俺に背を向けて苛立つ少女が立っているだけだった。

どうやら、男女は今の間にどこかへ逃げてしまったようだ。

俺が状況を把握していると、口元をへの字にしたまま、少女が俺の方を振り返り、キッ、と睨む。

そして、トコトコと俺の元へと近づいてきた。ごく丁寧に、固定された俺の足を考慮して、俺の目の前に回り込む。

そして、

「ふざけんなっ!」

俺の顔面を思いっきり殴り付けた。「ぐはっ」

頬にめり込んだ拳の感覚がしたと思ったら、気がつくど地面に後頭部を打ち付けていた。

口の中が切れたようで、舌を頬の裏側に押し当てると傷口と出血が確認できた。

「くそっ、何しやがる!」

俺は、少女に向かって怒鳴る。

「それはこっちの台詞だ!」

しかし、少女は俺の声よりもデカイ声で怒鳴り返した。そして、俺の胸ぐらをつかみ、強引に俺を立たせる。

なんだよ、コイツ。どんだけ力あんだ。

……やっぱり、狂ってる。

「いいか、よく聞け。お前は何か勘違いしているようだから教えてやるっ。」

私たち使役者^{ユーザー}は、人間の中で、自身の特定の法則を操れるようになった人間のことを言う。

つまりは、人間と何ら変わったところはないのだ。

ところで、貴様は差別という言葉はどう思うっ?」

少女は俺の胸ぐらを離し、聞いてきた。

「どつって、よくないことだと思っけど……」

俺は、とりあえず、自分の素直な意見を述べる。

差別はよくないよな。うん、よくない。

「そう。白人による黒人差別。ナチスドイツによるユダヤ人の差別。それらは、私たち人類にとって忌むべき歴史だ。」

だが、お前の言っていることも差別だということに気づいているか？」

「どつという意味だ？」

少女の言っていることがわからず、俺はそのまま質問で返した。

「黒人もユダヤ人も、そして、私たち使役者も同じ人間だと言っことだ」

少女は意味不明なことを言った。

それくらい、俺だって分かってるのに。

「とにかく、今、このままでいるのはよくないな。私はともかく、神田白亜。貴様も、これからは過激派から命を狙われることになるだろうからな」

「はあ？」

今、聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。

いや、実際は、先程の黒髪男女の発言のときに薄々気づいてはいた。でも、何かの手違いだと思いたかった。

そもそも、俺はこいつらの仲間になつたつもりは無いんだ。

ジトーっと、俺は横目で少女を盗み見るが、それで現実が変わるわけではなく、ため息が出るだけだった。

「やっぱり、俺も命を狙われるのか？」

「当たり前だ。お前はさつきから否定しているが、私があの子態使いに勝つた時点でお前は私たちの仲間になることが決定したのだ」

「おい、本人の意思はどこいった」

「お前の意思を考慮したとしても、過激派の連中がお前を敵と見なしたのだから、私たちと手を組んだ方が得策ではないか？」

『敵の敵は味方』と言うだろうか？

それとも、能力の解放も出来ていなくせに、一人で過激派に挑むか？」

そこを突かれると痛い。

確かに、今の俺には、他の使役者とまともに闘える力も何も無い。

三態使いの男の言葉によると、俺は特別な使役者らしいが、それも能力が使えるればの話だ。

はぁ……。

俺は、自分の考えが使役者に似始めたことに気づく。

でも、実際、あんな闘いを目にしちまったら、使役者の存在を認めないわけにはいかないか。

俺は、心の中で、自分の思考が段々と狂いだしているのを正当化しようとする。

「分かった。お前たちと組もう。」

結局、生き残るには、その一択しかなかったのだ。

「うむ、利口な選択だ白亜」

少女は俺に向かって右手を突き出す。

「私の名前は観月紫だ。みづきむらこれからよろしくな」

「お、おう」

俺は、少女の手を握り、握手をした。

先程、俺のことを殴った手を握るといのは、なんとも複雑な心境である。

「さて、そうと決まれば、野外にいるのは不味いな……」

ちよつと待つてろ、と言って、観月は俺の家の残骸の方へと歩いていった。

何をするのかと、俺は観月を目で追いかける。

「ここでいいだろう」

観月はそう言って、俺の家の敷地の中心辺りで立ち止まった。それから、彼女は日本刀を取り出し、それを地面に突き刺した。

そして、俺の近くまで戻ってきた。

「フッ！」

ひざまづき、地面に両手を着け、少し力む。

すると、次の瞬間、

「うわ」

思わず声が出た。

目の前に、俺の家とよく似た家が建っていたのだ。

まあ、ドアのデザインとか、外壁の模様とか、ところどころに違つところもあるが。

「よし、こんなものだな」

観月は、自らの出来栄えに満足したのか、嬉しそうに言った。

「マジかよ……お前らって、こんなこともできるのかよ」

俺は、一瞬で出現した新しい我が家に驚愕しつつ呟いた。

「これは、私特有の能力だ。実体のある幻影をつくることができる。人呼んで、幻影使い」

少女が俺の隣まで戻ってきて、少し照れ臭そうに言った。

それにしても、俺の目の前にある、この家が幻影だと……。

「……って、待てよ。幻影ってお前の能力なんだから。だったら、お前が気を抜いたらこの家が一瞬で廃墟に逆戻りすることは無いのかわよ?」

「それは、大丈夫だ。先程、家の敷地の中心に日本刀を刺しただろう?」

「あ、ああ」

「あれは、私の愛刀、名前は若紫と言って、私の能力を最適な状態で発動する手助けをしてくれる優れものだ」

俺は、観月の刀が、ライフル銃や二丁拳銃やロケットランチャーに変わったのを思い出す。

「そして、若紫にはもうひとつ特殊な機能がある」

少女は指を一本を立てる。

「若紫は、私の力を溜めておけるバッテリーなのだ。」

この機能を使えば、若紫が私の幻影の持続をアシストしてくれる。

つまり、若紫を家の敷地の中心に刺したことによって、この家は長時間私の力の供給を受けなくても形を保っていられるということだ」

「なるほど……。じゃあ、そのバッテリーはどのくらい持つんだ？」

「フル充電で一日と少しだ」

「短っ!？」

「心配は要らない。私もこの家に一緒に住むんだからな。」

もちろん、既に私用の部屋を作っているから、私はそこを使う」

「へ?」

今、聞き捨てならない言葉が……。ってか、今日、聞き捨てならない言葉多すぎだろう。

「本日より、私 観月紫は神田白亜の護衛、及び、能力の解放の手助けをすることになった」

観月は口の端を僅かに上げて笑った。そして、俺に向けて手を突

き出す。

「とうとうことで、二度目だが、改めてよろしくな」

観月の手を見つめる、俺。

しかし、先程は流れで握手をしてしまったが、俺には握手を交わす以前に、やらなくてはならないことがあった。

「あのさ、」

「うん？　なんだ？」

ニコニコと聞き返す観月。

彼女に、俺は自分の足元を指差して告げる。

「この足、どうにかしてくれないかな？」

そこには、コンクリートの地面に深々と突き刺さった、俺の足があった。

第三弾：It's a bad school day

ところ変わって俺の部屋。

あのあと、観月の能力を使い、なんとかコンクリートから脱出することに成功した。

しかし、まさか、足元のコンクリートをハンマーで破壊するとは思いもしなかった。

未だに、俺の足の骨が折れなかったことが信じられない。

俺は、床に胡座をかき、自分の足を弄る。

……良かった。折れてない。

さて、観月のお陰で、家は元通りになった。訳ではないが、これから先の生活を送るにとしては悪くはないだろう。

幻影だろうがなんだろうが、極論を言ってしまえば、寒さを凌げて、暖かく眠れればいいんだよ。

半ば諦めである。

朝の非現実な光景を見たせいで俺の精神は限界に達していたのだ。

ところで

「やっぱり、家具はないんでしょうか、観月さん」

「すまん……」

現在、テーブルは愚か、ベッドさえも俺の部屋には存在していない。

それどころか……、

「とうか、これはどういうことだ？」

「どつやら、手違いで武器庫になってしまったようだ」

なんと、俺の部屋の床に銃やら、銃弾やらが散乱しているのだ。

「武器庫って何だよ。俺は武器か？ 武器なのか？」

「そ、そういうわけではないのだ。ただ、」

「ただ？」

「すぐに手の届くところに、武器を置いておきたかったのだ」

「やっぱり武器じゃねえか！」

あり得ねえ！

こんな奴とこれから過ごさないといけないと思うと頭が痛い……。

人のことを武器扱いするなんて、とんだ気違い女だ！

俺のことを、差別したという理由だけでぶん殴った女の台詞だとは思えない。

「お前さあ、人のこと殴つといて、自分は俺のことを差別するの？ いいご身分だなあ、使役者様はよう！」

「ち、違うんだ。私はそういう意味で言った訳ではないんだ」

観月が慌てて、俺のことを宥めようとする。

「じゃあ、どついう意味だよ」

俺は観月を疑うような目で見た。

「私の部屋の近くに武器を置いておきたかったのだ」

「さっきと何が違うんだーっ!!」

この野郎 いや、女が。まあ、いい。こいつ、結局、俺を武器扱いしてるんじゃないか？

そもそも、自分の部屋の近くについて、ここは俺の部屋だつづつの。武器を手元に置きたいなら、自分の部屋に置きやがれ！

って、あれ？

観月の部屋？ それって、どこだ？

俺は、先程の外での観月の言葉を思い出す。

『既に私用の部屋を作っているから、私はそこを使う』

それはつまり、俺の家に無理矢理、観月の部屋を増やしたことと
考えられないだろうか？

しかし、俺の見たところ部屋の増設は見られない。それどころか、
間取りは完璧に前の俺の家そのものだ。

という事は……。

俺の頭の中を最悪な考えが過る。

いつもなら、普通そんなこと考えねえだろ、と言って軽く否定す
るようなアホらしい考え。しかし、こいつなら言いかねない。

まさか、こいつの部屋って

「おい待て。お前の部屋ってどこだ？ まさか、こことか言わねえ
よな？」

不安を振り切るために、俺は思いきって訊いた。

「まあ、ここという表現も間違っではないかもしれないな」

観月は真面目な顔で腕を組みながらしれつと言った。

「おいっ！？」

なんだこれ？

俺の部屋にこいつが住むだとお？

こんな狂った奴と一緒に、しかも、同じ部屋に住むことになるなんて……。

ああ、やべっ、頭痛くなってきた。

「どうした、白亜？ 私と一緒に住むのがそんなに嫌なのか？」

「ああ、嫌だよ。お前と一緒にだと何が起きるか分からねえ」

「そ、そうか……」

俺の言葉にしゅんとなる観月。

やばい、言い過ぎたかな。

だが、元はと言えば、観月が俺の部屋に住むとか抜かすのが悪い。

もっと突き詰めて言えば、観月が俺の部屋に武器やら弾薬やらをばら撒いておいたのがいけない。

あれがなければ、俺もここまで強くあいつのことを拒絶はしなかっただろう。

「わかった、じゃあ、私の部屋の位置は変えることにしよう」

そう言って、トボトボと観月は、部屋の隅へと歩いていく。

「お、おい、どこに」

行くんだ？　と言おうとしたときだった。

ウィーン

という、モーター音が聞こえた。かと思つと、部屋の隅の天井が開き、ひとりで梯子が降りてきた。

そして、観月は、降りてきた梯子に手を掛けて上へと登って行くとした。

……………え？

「そこかーっ！！」

俺は思わず叫んだ。

話は変わるが、今日は平日である。

それがどういふことを意味するか、想像するのは難くないと思う。

だが、使役者とかいう異質な存在についてのことをすると信じてしまうほどに精神が疲弊している俺にとっては、なるべく思考をしたくないという怠惰が生まれていた。

つまり、単純に忘れていたのだ。

俺くらいの年齢の青年とは、切っても切れないあの存在のことを……。

プルルルル。プルルルル。

始まりは一本の電話だった。

「全く誰だよ、こんな時間に」

俺は悪態を吐きながら電話へとそのそと歩く。

ちなみに、今の時間は九時九分。リビングのテレビの画面の端っこに写っているので間違いない。

にしても、不吉な数字だな。

九が二つとか……。

って、俺は小学生か？

自分に不利そうな考えは即刻やめよう。

首を振り、俺は、未だ、プルルルルと、五月蠅く鳴っている電話の方へと歩き出す。

ちなみに、電話はリビングの中央から少しずれた壁際に置いてある。

なんとも、中途半端な位置だ。

元々は、俺の部屋に電話の子機があったのだが、家具が無くなっ
たせいで一緒に消えてしまった。

そうそう、言い忘れていたが、俺の部屋以外の家具は全て揃って
いる。

だから、リビングにある、電話の本体は無傷で健在しているし、
その他の家具もしっかりと存在している。

観月に、なぜ俺の部屋だけ家具が無くて、その代わりに武器類と
新しい部屋への入り口ができてるのだ、と問いただしたところ、俺
の部屋以外の部屋をまず作り直し、それから、俺の部屋を作ろうと
したが、その前に自分の部屋を作ってしまったため、俺の部屋に割
く力が無くなったのだという。

要は燃料切れというやつだ。

それにしても、なんとも酷い話ではないか？

護衛対象の部屋よりも先に、自分の部屋を作るとか。いくらなん
でも自己中過ぎるだろう。

あと、観月の部屋を見せてもらったが、なんというか、かなり豪
華だった。

まず、広さがおかしい。

ウチの敷地面積で一つの部屋を作ったら、このくらいの広さにな
るんじゃないかな、というくらいの広さだ。

そもそも、俺の部屋は一階にあって、二階はリビングになってるのに、どうして、こんな広さの屋根裏が　それ以前に、屋根裏と呼べるのが疑問だ　あるのか分からない。

朝から、何度この言葉を心の中で呟いているか分からないが、

こんなの、狂ってる。

とまあ、そんなことを言っても、現実是不変。

俺は、億劫になりながら、けたたましく鳴っている電話をやっと手に取った。

「もしもし」

『もしもし、神田様のお宅でよろしいですか』

電話越しからは、礼儀正しい女性の声が聞こえた。そして、俺はこの声に聞き覚えのあることに気づく。

「あれ？　晴宮センサー？」

それは、俺の担任の晴宮暁子（あきこ）の声だったのだ。

『あ、神田くん？』

センサーも、電話に出たのが、自分の生徒だと分かったからか、話し方がフランクになった。

『どうしたの？ 心配してたんだよ？』

「え？ どういうことっすか？」

さて、今一度言おう。今日は平日である。

そして、今の時間は九時を少し過ぎたところだ。さらに、高校の担任の先生から電話。

お分かりだろうか？

俺が、今、本来なら何をしているか……。

『え？ 神田くん。今日、学校来てないよね？』

「……………あ。」

時間が停止する。

と言つても、それは俺の中だけの話。現実是非情なほど正確に時間を刻んでゆく。

『おい、もしもし。神田くん？』

「ハッ！ す、すみません。い、今からすぐ行きます！」

『えっ！？ あっ、分か』

ガチャン！！

俺は急いで電話を切り、部屋へと戻る。

だが、そこで現実にぶつかることとなった。

「俺の制服は!？」

そう。俺の部屋からは一切の家具が消えた。それは、クローゼットも例外ではない。それはつまり、俺の制服はおろか、私服までもがクローゼットと共に消失したと考えて間違いない。

そこに、追い討ちをかけるように観月は言った。

「さあ、知らん」

「知らん、じゃねえよ!？ 元はと言えば、俺の部屋を後回しにして燃料切れしたお前が悪いんだろ!」

「うむ、そう言われてもな……」

観月は腕を組み、考える。

しばらく考えたところで、観月が何か思い付いたように手を叩いた。同時に、頭の辺りにピカリと光の点いた電球が浮かぶ。

「白亜よ、いいことを思い付いたぞ」

その言葉に、俺は、何かいい方法はないかと考えながら部屋の中を歩き回っていた足を止めた。

「あ？ なんだよ、いいことって」

「私の能力を使えば、貴様のパジャマを制服に変えることができる」

観月は、どうだっ、という顔をしてこっちを向いた。

「その能力を使うための力が無くなってんだろ」

「あ、そうだった」

観月の顔は、一気に驚きの顔へと変わる。

……おい、自分のことだろ。

まったく、しっかりして欲しい。

俺は、ため息を吐いて床を見つめた。

「……………」

ジーツと見つめ続ける。

何も考えずに床を見ていると、自分が何をしているのかだんだん分からなくなってきた。

拳げ句の果てには、朝の出来事について無意識に考え始めた。

いわゆる、現実逃避というやつだ。

何やってんだかな……………。

そんな俺を、遠くから静かに見つめるもう一人の俺もいた。

もう、ぐちゃぐちゃだ。

俺も、家も、世界も、何もかも！

「……………ん？」

俺の無意識の回想が、観月が俺の家を再び作った時点まで、進んだときだった。

俺は、ある可能性を思いつく。

「おい、観月」

「うん、何だ？」

考え事でもしていたのだろうか。腕組みをしていた観月がこっちを向いた。

「お前、この家ってどうやって作ったんだ？」

「何を今さら、それはもちろん私の能力で」

「違う。もっと具体的に。例えば、この家がここにあるということ
は、前の家はどうなった？」

「前の家？ ああ、あの廃墟なら、私の幻影空間に送り込んである」

「廃墟って言うな！ ってか何？ 幻影空間？ 何だよそれ」

「ここではない、別の空間だ。実体のある幻影を作れるなら、幻影の空間も作れるんじゃないかねえの？」というノリで作ったら、意外に創れた。

というわけで、その幻影空間からは私の好きなように物を出し入れすることができる。

そのおかげで、リビングや他の部屋に家具を運ぶことができたのだ。無論、貴様の部屋の家具も幻影空間の中には収納されている」

「なんか、滅茶苦茶だな……」

ここまで来ると、逆に呆れてくる。

「けど、これで助かる。お前の幻影空間から俺の制服を取り出せば万事解決だ」

そう。これで完璧。後は、観月が俺の制服を出して、それを着て学校に行けばいい。

だが、観月は不思議そうに首を傾げる。

「しかし、そんなものあったらどうか……」

「とりあえず、探してみてくれ」

俺は藁にもすがる思いで観月に向かって手を合わせた。

「うむ、そうだな」

頷いて、観月はおもむろに目の前に手を伸ばす。

すると、突然、観月の指先が消失し始めた。いや、違う。まるで、見えない何かに手をつ突っ込んでいるような感じだ。

「貴様の制服って、これか？」

観月が右肩辺りまで幻影空間へと突っ込んでから少しして、観月はそう言った。

俺の頭には、微かに学校へ登校するビジョンが浮かんだ。

しかし、次の瞬間。

「はぁ!?!」

「おっ?」

ずるずると出てきた布切れに、俺も観月も絶句する。

「なるほど、道理で私が幻影空間内で感知できないわけだ」

納得したように観月は呟いた。

観月の手の中には、かつて、俺の制服だったはずのボロ布だけがあつた。

……これは、アレだ。

そのボロ布を見た瞬間、俺は確信した。

その僅か一分後、俺は高校に欠席の旨を伝える電話をしたのは言
うまでもない。

第四弾：It tastes so sweet .

「さて……暇だ」

「それはごつちの台詞だ」

観月の呟きに、リビングの床に寝っ転がりながら俺は言った。

俺が学校に欠席の電話をした後、何も無い 弾薬や武器はたくさんあるが 俺の部屋にいても意味が無いということ、俺たちはリビングに来て、テレビを見ていた。

「 ってかさ、おかしくない？ どうして、俺が床に寝っ転がってるの!？」

俺は床から起き上がり、ソファアに横たわる観月を指差した。

「俺はこの家の主だよ、あ・る・じ！ その主が床で、この家を一度破壊した、いわば、この家から拒まれるべき人間がどうしてソファアで寝てんの!？」

「黙れ、この家を直したのは私だ」

「そのソファアは元からウチのだけどなあ!」

「よし、分かった。そこまで言うならごつしよう」

「な、なんだよ。言うておくが、俺は絶対にこの家の所有権を手放すつもりは無いぞ」

俺の警戒するような発言に、観月は軽く笑った。

「フツ、安心しろ、白亜。私とて別に貴様と波風を立てる気はない」
「じゃあ、どうする気なんだよ……」

「簡単な話だ。この家の元々の所有者は白亜。そして、この家を直したのは私。ならば、この家の所有者は私と白亜、二人に平等に与えられるべきではないか」

「妥協早っ!?!」

俺の第一印象からは考えつかないほど早く、観月が妥協点を提示してきた。

はっきり言って驚きだ。

俺の予想では、俺が折れるまでこの一進一退の攻防は続くものだ
と思っていた。

「ま、まあ、それでいいんじゃないか？」

俺が呆気にとられながら、そう返すと、

「ならば、ソファァーの使用は早い者勝ちということだな」

観月が勝ち誇ったように笑いながら、俺を見下ろした。

「……あっ！ チクショウ、そういうことか。お前、卑怯だぞ」

「はっ、なんのことだ？ 貴様だって、一度は了承したではないか。卑怯などと言われる筋合いはない」

「ああ、もう！！」

結局、波風が立った。

「OK、OK。分かったよ。早い者勝ちだな。じゃあ、先にソファーに座った奴がソファーを使えるということだ」

「ふん、最初からそうすれば良かったのだ」

やはり、俺の予想は間違っではいなかった。最終的に俺が折れることで、このソファー事件は解決した。

それにしても、観月の言葉に全く、波風を立てないようにする意識を感じ取れないのだが……。

まあ、それはいいとして、

「なあ、観月」

「なんだ？」

「聞きたいことがある」

「ほう、意外だな」

観月が眉をピクリと動かした。

「な、何が意外なんだよ」

俺は、観月の驚いた態度に噛みつくが、内心、自分でも驚いていた。

「貴様、人に頼ることが嫌いだろ」

「え、まあ、な」

な、なぜ分かった!?

確かに、俺は人に頼ることが嫌い　　というか、苦手だ。

ぶつちやけた話、俺は昔から一人で何でも出来た。

勉強だって、何にしたって、一人でやったほうが効率がいい。他人の存在はむしろ邪魔でしかない。

そう考えると、俺は、この、一人で何でも出来たという傲りのせいで、誰かに頼るといふ弱い行為を否定していたのかもしれない。

もしかしたら、そのせいで忘れてしまったのかもしれないな。

自分が伸ばした手を掴んでもらう方法を。

「ってか、何で分かったんだ。俺が、他人に頼るのが苦手なんて」

俺は、観月に聞く。

ついでに、『嫌い』を『苦手』に言い換えておいた。

「何故って、それは誰だって分かるだろう。」

貴様は自分と違うことやものを否定している。それだけ見れば、貴様が他という存在を拒絶していることは一目瞭然。

だから、何よりも拒まなければならない他である他人に教えてもらうことを毛嫌いしているのだろう？」

「別に嫌いってわけじゃねえよ。ただ、苦手なだけだ」

「ふうん、苦手、ねえ……」

観月が俺を見透かそうとするかのように目を細める。

俺は、背筋がゾツとするのを感じた。

「な、なんだよ」

「いや、別に」

俺は、観月がその言葉をどういう意味で言ったのかよく分からなかった。

くそ、だから、他人は嫌なんだ。めんどくさいったらありゃしない。

って、やっぱり他人は嫌いなのか？ 俺は。

そんなことを一人で考えてると、観月がニヤニヤと笑っていた。

「だから、なんだってんだよ！」

「ははっ、そうだよ。それだ」

「はあ？」

俺は怒鳴ったはずなのに、怒鳴られた本人である観月は笑いながら手を叩いた。

「もっと素直になれ。私に全て話してみろ」

「まったく、なんなんだよ！ お前」

訳が分からなかった。

「はははっ」

ついには、観月は笑っているだけになっていた。

何が起きているのか把握できなくなる。

部屋には、観月の笑い声だけが響いていた。

「ははは、……ふう」

しばらく経ち、観月が落ち着きを取り戻した。

何となく点けていたテレビのワイドショーの音がリビングに戻る。
てくる。

「……落ち着いたか？」

俺は恐る恐る尋ねてみた。

「何を言う。私はさっきから　プッ」

クツクツクツ、と観月の背中が小刻みに上下する。

「落ち着いてッ……いるぞ？」

「嘘だっ！？　最後の疑問形が何よりの証拠だ！」

「さて、冗談はここまでにしておこう」

「ええ！？」

「いったい何だったんだ？　今の件^{くだり}。」

疑問を感じている俺をよそに、観月は話し始めた。

「結局だな、私が何を言いたかったのかと言うと、私と貴様はこれから護衛する側とされる側の人間だ。」

つまり、私たちの間には信頼関係が成り立っていないければ、護衛するにしても話にならないということになる」

「はあ……」

分かるような、分からないような。

「でも、信頼なんてそんなに大事なもののなか？ 別に無くても護衛はできるだろう」

「まあ、そうだな。できないこともない。

では、逆に聞こう。

貴様は、自分のことを全然知らない赤の他人に守られたいか？」

「え？ ああ、いや、それは嫌だな」

他人に頼るのは心配だ。

「だろう。ならば、護衛する側もされる側も互いにある程度親しくなくてはならない」

「なるほど、筋は通ってる。だったら、さっきの意味不明な行動は何だったんだよ」

突然、笑いだして扱いに非常に困った。

「あれか？ なに、簡単な話だ。

人と人が信頼関係を築くのに最も簡単な方法、それは、本音をぶつけ合うことだ。

だったら、嫌いなものはハッキリ嫌いだと言ってもらわなければ困る」

「ああ、そういうことか。　　って、待て待て。結局、どうして笑ってたのかだけ聞いてないぞ」

「それは、貴様に本音を話させるのが思ったより簡単だったからだ
ッ
ッ」

観月は、思い出し笑いをする。

ああ、なんだコレ。

「ふっ
」

思わず、少し吹き出してしまった。

「おお、笑った、笑った」

観月は、笑顔で俺の方を見てきた。

しかも、うつすらと涙まで浮かべていやがる。どんだけウケてんだ。

「うつせえ、俺だって、少しは笑うわ」

そんなことを思ってる俺も、実はメチャクチャ笑っていた。

リビングには、再び、笑い声が響き渡ったのだった。今度は、二人分の。

しばらくして、

「笑いすぎて、喉が渴いた」

観月が呟いた。

「そうか、じゃあ、俺、コップ持ってくるから、冷蔵庫から何か飲みたいもの出せよ」

俺は立ち上がりつつ言った。

「ああ、分かった」

ウチの冷蔵庫には様々なものが入っている。俺が選ぶよりかは、観月本人が飲みたいものを選んだほうがいいだろう。

ぶっちゃけ、俺はなんでもいいし。

そして、俺は食器棚へと向かう。

そういえば、客人に飲み物を出す場合、どんなコップを出せばいいのだろうか？

そんな考えが頭をよぎった。

別に、特に考える必要などないのかもしれないが、何せ、相手は女だ。

男の俺では思わないことまで、思ってしまうかもしれない。

俺は注意深くコップたちを眺めた。

食器棚の中には二種類のコップがあった。

一つは、ガラス製のグラス。もう一つは、セラミック製のカップ。いったい、どっちがいいのだろう。

グラスは客に出すというイメージが強いのだが、もし、そのイメージが強すぎて、相手を突き放しているように思われたらどうしよう。

せつかく、観月とも打ち解けてきたのに、ここで仲が悪くなったたんだか、精神的に来るものがあるし。

かといって、カップを出せば、身内で使うというイメージが強くて嫌がられるかも……。

食器棚の前で考え込むこと約三十秒。

はっ！

俺は画期的な方法を思いついた。

一個ずつ持っていけばいいんだ！

俺ってばマジ天才。

そんなことを考えながらグラスとカップを一個ずつ取り出す。

そこで気づいた。

「うわ、いつぱいあるな。どれにするか」

観月は今、冷蔵庫から飲み物を選んでいる。

つまり、現在、ソファーには誰も座っていない。

そして、ソファーの占有権は早い者勝ちという話を先程したばかりだ。

だが、あの話には明確な占有権の期限は出てこなかった。つまり、本人がソファーから離れた瞬間にその占有権は効力を失う。

ということは、再び、ソファーの占有権は早い者勝ちに戻る。

俺は、ソファーの前にあるテーブルにコップを置こうと歩き出す。

バレないように、悟られないように……。

チラッと、冷蔵庫の方を見る。

よし、まだ、冷蔵庫を覗いている。

「おい、白痴」

「は、はい……？」

な、なんだ。まさか、バレたか？

「面倒だから、複数取り出しでもいいか？」

なんだ、そんなことか。

「ああ、別にいいぞ」

「そうか、なら」

観月は両手を冷蔵庫に突っ込んだ。冷蔵庫から飲み物の紙パックを取り出そうとしているのだろう。

チャンスは今しかない。

俺は冷蔵庫の前にいる観月に全神経を集中させながらソファへと移動した。

観月から視線を外すことなく、ゆっくりとテーブルにコップを置く。

よし、気づかれていないようだ。

「ソファーはもらった！」

俺は、そう高らかに宣言して、勢いよくソファーに座り込む。

むぎゅー。

「しびゆー！？」

……！？

今、声がしたような。

それどころか、この感触はなんだ？

俺の家のソファーって、こんなに固いような柔らかいような訳の分からない弾力を持っていただろうか？

……いや、現実逃避は止めよう。分かってる。今、俺が何をしてるかって。

俺は今、

「いつまで乗ってる気だっ！」

観月の腹の上に座っていたのだから。

「お、お前こそ、どうしてそこにいるんだよ！ だって今、冷蔵庫の方に」

俺は、すぐに観月から離れ、冷蔵庫付近を指差した。

だが、俺の指の先にも、もう一人、観月がいた。

「ええっ！？」

な、何がどうなって……。

いや、待てよ。

「なに、お前、ちゃっかりと能力発動しちゃってんの！ そんなに力が残ってんなら、早いとこ俺の部屋を直せ」

観月の能力は質量のある幻覚を操ること。ならば、分身を作るなど朝飯前に決まっている。

「よく見破ったな。これで貴様の思考回路も晴れて使役者の仲間入りだ」

観月がニヤリと笑った。

「嬉しくねえわ！」

「うわ、私はなにもしてないのに怒るなんて、キレる十代だ。お、怖い怖い」

「お前は、なにもしてないだろう！」

「おい。とりあえず、飲み物はテーブルの上に置いておくぞ」

そこへ、もう一人の観月が割り込んできた。

「そうか、ありがとう」

今度は、こっちの観月がそれに応えた。

「それでは、私は戻る」

ポンッ。

もう一人の観月は、本当に分身みたいに消えていった。

「やっぱり、すげえな。使役者って」

なんというか、なんでもありだ。

「お？ 普通じゃないことに対しても素直になってきたじゃないか。私は嬉しいぞ、白亜」

「う、うるせえよ」

俺は、なんだか気恥ずかしくなってきたので、観月から顔を背けた。

そして、おもむろに、テーブルの上に置いてあったオレンジジュースのパックとグラスを取り上げ、注ぐ。

「誰かさんのせいで久々に怒鳴ったから喉がカラカラだ」

俺は、オレンジジュースを飲み干した。

なんだか、すごく甘ったるい味がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610x/>

カミカゼに乗せて

2011年12月29日08時51分発行